

小林多喜二全集の編纂過程

——『貴司山治日記』にみるその表裏——

伊藤 純

1. はじめに——戦前のこと

戦前、小林多喜二の著作は、読解不能なほどの伏せ字が強要され、また刊行しても即日発売禁止になることも多く、その刊行物を幸運にも入手できたとしても、所持が露見すれば官憲に拘束され、留置場に留め置かれ、警察官の恣意的な暴行をうける可能性もあった。

しかし、そのような状況下でも、意外に多くの著作が刊行されている。国立国会図書館に所蔵されている戦前刊行の小林多喜二の著作を検索すると、33件がヒットする。

その中でも、全集として計画されたものは、虐殺直後に刊行された『作家同盟版小林多喜二全集第二巻（国際書院刊）』、その二年後1935年に刊行された『小林多喜二全集1～3巻（ナウカ社刊）』である。

前者の『作家同盟版小林多喜二全集』は、「蟹工船」と「不在地主」を収載した第二巻だけが刊行されて頓挫する。この作家同盟版の刊行経緯は、例えば戦後早期の『富士出版社版小林多喜二全集』¹⁾では手塚英孝の解題に、

「……装釘喜入厳、扉題字江口渙。この版は作者の没後、江口渙、宮本百合子、貴司山治等数名の編纂委員によって着手され、この一冊を刊行、中絶したもの。……」

とあるが、この情報の典拠は示されておらず、多喜二虐殺直後という緊迫した状況下で、極めて短時日に行われた編纂事業の実態は必ずしも明らかでない。「貴司日記」も官憲への警戒から書くことを止めていた時期に当たり、これに関する記述は存在しない。ただ、戦後出版された民衆書房版「党生活者」の出版事情の検討から、貴司は『作家同盟版小林多喜二全集』にも深く関わっていた可能性が示唆される。（後述）

後者の1935年『ナウカ社版全集』（小説1～3巻、書簡集、日記補遺）刊行については、「貴司日記」に記載がある。

「小林多喜二全集をナウカ社から出すことに旧臘に話がきまり

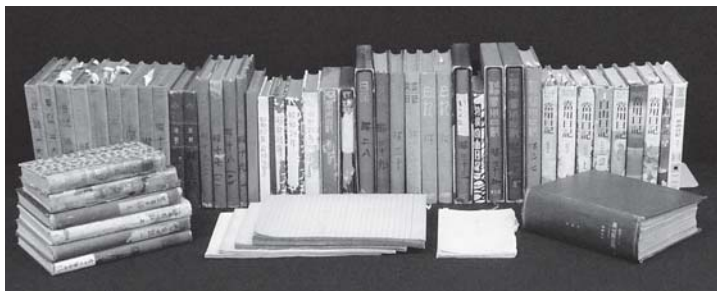


図1 「貴司山治全日記」1919年～1971年 徳島県立文学書道館所蔵
2011年1月人名索引付きDVDで刊行されている

その編輯についてこの間、中野重治を同道、同社へ行って社主の大竹氏と相談し小説のみを三巻に別けて出すこと、一冊六百五十頁位とし、四六版一円五十銭、初版千部、印税一割、……」(日記1935/1/15)²⁾

と具体的な事項が明記されている。また、戦後最初の小林多喜二全集である『新日本文学会版』の第三巻月報に貴司は『『小林多喜二全集』の歴史』という一文を書いており、そこに戦前のウカ社版編纂のことを記述している——³⁾

「……この最後の努力は三四・三五・三六の三年ごしの仕事となった。このころは、もう小林多喜二の本を出す仕事などに相談にあずかってくれる人もなく、多くの旧ナルプ(*日本プロレタリア作家同盟・伊藤注)の文学者たちでも、こわがるか、いやがるか、でなければ無関心であった。おかげで私はこの仕事をひとり占めにすることができて、ずいぶん楽しかった。……」

“ずいぶん楽しかった”と書いているが、実態はそんなものではなかっただろう。

時代は1935年、昭和10年である。日本は国際連盟を脱退し、国際的孤立の中で戦争へと追い込まれていく過程にあった。社会主義にとどまらず、反体制的……どころか、いささかの政府批判的言動も根絶しようという「国民精神総動員」の志向が芽生えつつある時代だった。(国民精神総動員実施要綱が閣議決定されるのはこの2年後1937年である)

取締は治安維持法の拡大解釈……というよりは法を越えた恣意的拡大によって、例えば警察犯処罰令による一ヶ月限度の拘留期間を毎月更新することで、「参りました」というまで無期限の長期拘留を、それも環境劣悪な警察留置場で実現できる「強制収容所」的なやりかたが、「殴る蹴る」に代わる思想改変のノウハウとして一般取締現場で普通に行われるようになってきていた。⁴⁾

貴司はそれ以前、1932年と1934年二度の長期拘禁を受け、その結果、共産主義を支持することを止め、働くものに寄り添う“良心的な”物書きとして生き残る、という独特の転向戦略をたてた。⁵⁾

そして、1934年～1936年という時期に雑誌『文学案内』の発刊、東京地下鉄のストライキ取材とそれに基く長編小説「地下鉄」の起稿、『小林多喜二全集』の編纂刊行、といったまとまった仕事をした。

しかし、官憲はこれを転向と認めるほど甘くはなかった。貴司は1937年、再度、1年という長い執拗な拘禁をうけ、『文学案内』の仕事が総て共産主義宣伝行為の一環と認定され、実刑が不可避という状況に迫られる。結局、旧友の有力官僚(赤木桁平)に渡りをつけて何とか実刑は免れるが、いわば「完全転向」に追い込まれるのである。

「雨あがり、新緑の好いお天気。検事局出頭。山根係検事から起訴猶予の言い渡しを受ける。年の若いこの検事恐ろしく自分を敵視してガミガミいふこと一時間あまり、……折角さっぱりした気持ちになれず、憂鬱な気分が霞ヶ関の通りへ出てくると、とてもさはやかな空

気なのだ。とにかく、これで去年一年間の仕末がやっとなつたわけだ……」（日記 1938/5/20）⁶⁾

1928年以來の貴司の一つの志はこうして終わった。貴司が小林多喜二と“再会”するのは戦後、1947年のこととなる。

ただ少なくとも貴司は戦前の危険な時代に、二回にわたる『小林多喜二全集』編纂に深く関わったことは間違いない。しかしその実態は不明な点が多く、さらに検証を重ねる必要があり、別稿としたい。ここでは、直接的記述がある戦後の全集編纂事業について以下、述べることにする。

2. 戦後の“多喜二との再会”

戦後数年を出ない時期から開始された新日本文学会の『小林多喜二全集』編纂事業は、その後の全集編纂事業の基礎をなす重要な仕事となっている。現在の『定本』や『全集』の書誌、テキストの基本はこの『新日本文学会版』によって形作られた。

ところが、1968年刊行の『定本小林多喜二全集全15巻』、1982年刊行の『小林多喜二全集全7巻』（いずれも新日本出版社刊）などに関しては宮本阿伎、大田努らによってその実態が語られているが^{7), 8)} その書誌的基礎を提供した『新日本文学会版』については、編纂の経緯があまり明らかになっていない。

1954年1月の雑誌『多喜二と百合子』に手塚英孝の「多喜二全集の完成」⁹⁾という一文があり、戦後の編纂事業についても極めて概括的な説明がなされている。また、『新日本文学会版全集』各巻の解題にも、書誌的な解説は付されているが、資料や情報の具体的な典拠・出所についてはコメントが少ない。「多喜二全集の完成」に自ら「それぞれの時代にわたって数百人の人々の二十年間の協力の結集……」と書かれている、その数百の人々の多喜二資料を守り伝えようとした思いや行動がせめて典拠を示す形ででも、記載されていない感は否めない。

貴司日記と照合していくと、貴司と手塚が協働して動いていた時期に得られたと推測される資料や情報についても、そのような記述はなく、手塚英孝オリジナルの見解というように見えてしまう場合が少なくない。このことについては、佐藤三郎のブログ¹⁰⁾にも――

「……初めて多喜二全集編纂を担当する運命を担いながら、多喜二研究史ではその存在を抹消されてしまった貴司山治……」

という言及もあり、ことに、貴司山治に関しては、意図的にネグレクトされているのではないかと、という印象を受ける。

貴司日記を調べると、『新日本文学会版』編纂事業の初期に、貴司はこれに参加することで“多喜二との再会”を果たしている。貴司日記の具体的な記述によると、1947年秋から1949年春までの間、編纂委員会の事務局長あるいは会計係といえるような中心的な立場で、足繁く動いている。編纂委員会の日時や開催場所、出席者なども記録されている。

ところが、1949年春、急に貴司と編纂委員会の間に疎隔が生じる。以降約4年間、貴司日記から編纂委員会の記事はなくなる。つまり出席していないと考えられる。

そして、1953年3月から1954年7月にかけて、再び3回の編纂委員会の記述が日記に登場する。

この1953年春という時点は、すでに『新日本文学会版全集』は第九巻までの刊行、1952年8月の富士出版社によるその1～9巻再版、12月の青木書店による10～12巻を追加した新版の刊行がすべて終わった時期——つまり戦後最初の編纂事業が完結した時期といえる。

この1954年の会は貴司が要求して開かれたという記述も有り、貴司にとっては『新日本文学会版』編纂事業の総括、後始末といった意味を持っているように思われる。

さらに、この1954年の会議から12年も経過した1965年8月12日、突然、1954年の総括的会議を思い出してもう一度総括する……いわば腹中に溜まった思いを日記帳にでも書き付けておかなければ気がおさまらない、といった意気込みの、長文の記述が登場する。それは、内容的に鬱屈が強すぎて一方的な感じは免れないが、編集委員会と疎隔を生じて以来17年、貴司の心底に、ある思いがわだかまり続けていたことを強く印象づける。そしてこれが、『小林多喜二全集』編纂委員会に関する貴司日記の最後の記載となる。

以下日記の文面を具体的に点検していこう。

3. 『小林多喜二全集編纂委員会』への参加と蜜月時代

日本敗戦2年目の晩秋、1947年11月25日、貴司は初めて手塚英孝の来訪を受け、小林多喜二遺稿編纂事業への参加を懇請される。これが貴司と手塚の初対面であった。

- ① 1947/11/25「仕事中へ手塚英孝君くる、初対面。小林多喜二遺稿編纂の件。夕方かへる。」
(*「」内は日記原文、……は中略箇所、下線は伊藤、以下同)
- ② 1947/11/29「手塚英孝君くる。このまへの話のつゞき。小林全集編纂委員を承知する、しかし昔の話ばかりしているのは気のめいるものである。」

「気のめいるものである」という言表のサブテキストは何であろうか。第一義は言葉通り、多喜二虐殺、その惨憺たる遺体を囲んでの警察に取り巻かれる中での葬儀など、暗く衝撃的な記憶、さらにはそれに続く弾圧の深化と転向に追い込まれ「肉体が変化した」といわざるを得なかった絶望的な時代の、身体の底に沈殿している“イヤな感じ”……いまさら反芻したくもない、という気持ちであろう。たかだか10年前の記憶なのだ。

しかし、もう一つ、この時期の日記には何故かほとんど記されていない、多喜二に絡む事実がある。1947年1月に、大阪の民衆書房という小さな出版社から『党生活者』一冊本が刊行される。筆者の調査によると、この本は、戦前からの知友牧野弘之と語らって貴司が編纂刊行したものであることが判明した。牧野弘之はこの刊行直前まで、貴司が京都で発刊していた雑誌『東西』の編集長であり、発刊当時は共産党大阪地方委の幹部だったと推定される。しかもその版は、1933年の作家同盟版多喜二全集発刊事業の中で第一巻として予定されながら挫折し、官憲の目

をかすめていずれかに秘匿されていた『党生活者』の紙型を流用したものである。この経緯の詳細は筆者別稿¹¹⁾を参照されたいが、いずれにせよ、ほんの一年たらず前に貴司は多喜二と深く関わる仕事をしており、いまさら「気のめいるもの」でもあるまいと思われる。

この、誇ってもいい仕事日記に殆ど記載されていない（小林家に印税を支払ったと思われる記載がチラとあるが）ということは、戦前いずれかに秘匿した紙型を持ち出してきて、ことさら関西で出版するというのに、何か、正当性を欠く、抜け駆的な背景があったのかも知れない。

そういった動きの後に貴司は、全集編纂委員会への参加を要請されるのである。手塚英孝が参加を要請してきた、その背景は何だったのだろう。手塚個人の思いつきとは考えにくい。

そもそも、「小林多喜二全集編纂委員会」（奥付によると「小林多喜二著作刊行会」とはどういう集まりであり、主体は誰だったのか。『新日本文学会版』には「編纂委員」として――

江口渥、勝本清一郎、貴司山治、窪川鶴次郎、藏原惟人、壺井繁治、手塚英孝、中野重治、宮本顕治

が連名され、さらに校訂解題者として別に手塚英孝が再掲されている。

他方で、貴司日記から確認できる委員会の実態と、編纂関連作業の概要を列挙すると――

③ 1948/4/20 <藏原宅委員会> 出席者不記載（「雨中自転車で」、「夜に入るまで仕事」……などの記載。因みに吉祥寺の貴司宅と、下石神井の藏原宅は4キロ程度の距離）

④ 1948/8/8 <藏原宅委員会> 壺井繁治、手塚英孝、小田切弟、貴司（午後自転車で、弁当持ち、夜9時まで）

⑤ 1948/9/14 <京都>大雅堂書店で小林多喜二作品集の編者川並秀雄氏と面談。川並本の印税割合、小樽の小林の母の家からこの男が持ち去った小林のノオト、掲載雑誌類保存のことで協定……

⑥ 1948/9/26 <藏原宅>先日の「川並氏との協定を報告」（雨中自転車）

⑦ 1948/10/6 <川並宅訪問>大阪阪急書籍部前で東京からくる手塚と落ち合う。「手塚君はちゃんとやってきて立っていた。……甲東園の川並秀雄氏を訪ねる。」

「懇談の結果、同君の手もとに「オルグ」

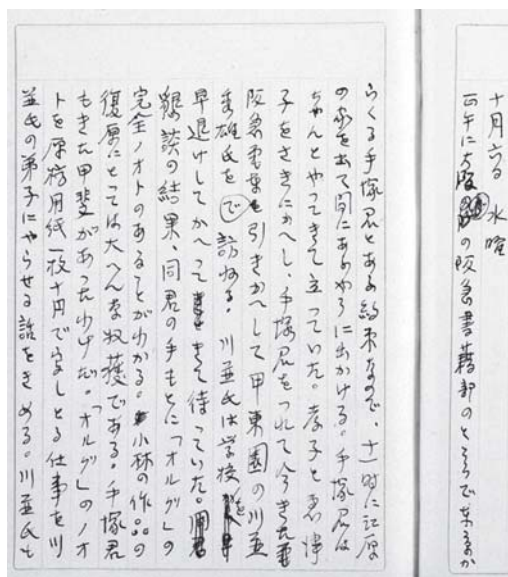


図2 貴司日記 1948年10月6日 川並秀雄氏を訪問

の完全ノオトのあることがわかる。……手塚君もきた甲斐があったわけだ。「オルグ」のノオトを原稿用紙一枚十円で写しとる仕事を川並氏の弟子にやらせる話をきめる。川並氏もそれで安堵して、喜び、われわれをひきとめる。……夜の戸外は暴風雨になり始めてすでに雨がふっている。あきらめて川並氏の家に泊る。」

⑧ 1948/11/24 <手塚来宅> 「夕方手塚君，小林全集の用件で来訪。同君も何やら気分がはれないらしくこれから新宿へ出て活動写真でもみてくるといってかえる。」

⑨ 1948/12/4 <中央公論社> 南清市氏（中公社員）に中村恵（多喜二虐殺時期の中央公論編集者）の行方，「党生活者」原稿などの搜索を依頼。

⑩ 1949/1/10 <蔵原惟郭翁（惟人父）葬儀> 「……夕方までゐる。その間に小林多喜二全集の相談も少しする。激変する情勢の中で手塚君一人ではその仕事は重荷らしい雲行である。」

⑪ 1949/1/12 <壺井繁治宅委員会> 「一時から夜まで」出席者不記載。

⑫ 1949/1/24 <第24回総選挙> 「共産党の当選者多数。谷口善太郎も五万票で当選。おやおや。」

⑬ 1949/2/26 <契約書など作成> 「小林全集委員会の契約書その他を書く。半日以上かゝる。手塚君来り，小林虐殺当時の事情を直接知っている人々の座談会をひらいて真相記録を今の内に作っておきたいという話。」

⑭ 1949/2/27 <蔵原宅委員会> 手塚，壺井，蔵原，貴司。夜までかかって契約書二通と委員会規定をきめる。

⑮ 1949/3/1 <日本評論社> 手塚，蔵原，貴司。「編輯長彦坂君と契約書の審議と，前払金交渉，夜に入る。」終わって「代々木の会合に行く蔵原君，疲労して氣力を失い，やめてかへるというので八重洲通りのすしやへつれて行き，手塚君と三人ですしとそばを食い，ビールを一本のんで別れる。」

⑯ 1949/3/5 <多喜二虐殺時の調査座談会> 「午後一時すぎ世田谷の中野重治宅へ行く。中野は九州へ旅行中。原泉子，壺井栄，江口渙，蔵原惟人，手塚英孝，立野信之，佐々木孝丸，青柳盛雄，笹本寅，小林三吾，同セキ，など，当時の関係者による小林の殺された当時の事情究明のための座談会。全集別巻研究資料篇に入れるのが目的。三時から七時まで自分が司会してぶっつゞけに進行。……」

——などである。

ここで見られるように、委員会とはいってもその出席者は判で押したように「蔵原」「手塚」「貴司」、時に壺井繁治が出席している程度である。一度だけ、編纂委員に含まれていない小田切進が出席しているのが目に付く。

もちろん、編纂委員に名を連ねながら、出席の気配が書かれていない人々の中には資料面や校訂などで協力している人々もあるだろうが（例えば勝本清一郎のように）、編纂実務の実働部隊はこの時期、貴司と手塚だったことがわかる。そしてこの“実働部隊”は、例えば川並秀雄との交渉経過を直ちに蔵原惟人に“報告”し（⑥参照）、あるいはこの委員会の規約や契約書（これは⑮の記載から日本評論社との出版契約であることが分かる）などは、貴司が原案をつくっているが、後刻蔵原の面前で検討され裁可されてはじめて正式のものになる（⑭参照）、というような実態が記述されている。要するにこの委員会の決定者・委員長は共産党中央委員で文化部担当者であった蔵原惟人なのである。

また手塚英孝は、佐藤三郎ブログ¹²⁾によれば、戦後早期から共産党本部職員となり蔵原の部下だったが、1947年2月、これを止め多喜二全集編纂委員会の専従者となっている。共産党本部からの出向ではなく、給与は編纂委員会が支払ったととれる記載や、編纂事業終了時点で委員会が手塚に退職金を支払う決定をするという記載が貴司日記にある。

要するに『新日本文学会版小林多喜二全集』の編纂事業は、共産党……あるいは宮本顕治、蔵原惟人のリーダーシップで実行された事業と考えられる。そして、その事業に貴司を呼び込んだのは、委員長たる蔵原惟人であったと思う。

この20年近く後の、1965/8/12の日記から、当初この委員会に参加した貴司は、事務局長兼会計担当という役割を引き受けたことが分かる。つまりは、『新日本文学会版小林多喜二全集』編纂委員会は、当初、実質的に蔵原委員長、貴司事務局長、手塚専従編集員、というトロイカ体制で活動し始めたと考えられる。そしてそれは、あの1933年以来のそれぞれの想いを具現できる、よき結びつき、ある種の蜜月時代であったことが推察される。

以下、日記引用部分の、人間的雰囲気も含めて、活動実態が推察できる記載について、若干のコメントを述べておきたい。

⑦ 1948/10/6 川並氏宅を訪問するため大阪急書籍部前で東京からくる手塚と落ち合うが、その様子を貴司は「手塚君はちゃんとやってきて立っていた。」と記す。なにげないその記述に、生真面目な書誌編集者たる手塚英孝の面影が巧まず浮き上がる。これを見ると、貴司が戦前、無産者新聞の取材などで、新橋駅あたりで柳瀬正夢と落ち合うときの描写を想起しないではない¹³⁾。柳瀬は平気で何時間も遅刻しながら、「やあ、少し遅くなっちゃった」と満面に人なつこい笑みを浮かべてやってくる、という。……その柳瀬が死んでまだ三年ほどしかたっていない、そういう時代のことなのである。

⑩ 1949/1/10 蔵原惟郭翁葬儀の席を借りて関係者が編纂事業のことを話し合い「激変する情勢の中で手塚君一人ではその仕事は重荷らしい雲行である。」と記されている。

何がどう重荷なのか具体的なことは書かれていないが、この前後の日記には「(手塚君が) 何やら気分がはれないらしくこれから新宿へ出て活動写真でもみてくるといつてかえる。」

(1948/11/24) とか、責任者である蔵原惟人までが「代々木の会合に行く蔵原君、疲労して気力を失い、やめてかへる」(1949/3/1) といい、組織の会議に行きたくなるほど何事か落ち込んでいる有様で、寿司屋へ連れて行ってビールで慰めるといった記述も見える。その流れから見て、落ち込む原因は編纂委員会そのものことではなさそうで、この時期“党人”たちが何事か疲れているように見えるのである。

その事情は推察するしかないが、確かに1948～1949年は、戦後の大きな転回点となった時期といえる。1948年1月、アメリカ陸軍長官の「日本の占領目的を非軍事化から反共防壁の構築へと転換すべきである」という、東西冷戦（この言葉は1947年頃から使われ始めている）という新たな情勢の中での日本の位置づけを予告する発言が、この時期の歴史の焦点が何であったのかを暗示する。1949年に入ると、中華人民共和国が成立するという東アジア情勢の激変を踏まえて、日本占領の総帥マッカーサーも「日本は赤化東進の防波堤」と、占領政策の転換を明示する。49年には、労働運動の潮流を一気にひっくり返そうという謀略との疑いがぬぐえない下山事件、三鷹事件、松川事件など不可解な事件が続発し、1950年6月25日の朝鮮戦争の勃発によって日本列島は冷戦アジアに於ける西側最前線兵站基地としての位置づけを完結する。

このような東西冷戦体制の構築が進み、日本は急激にその体制に組み込まれつつあった時代、日本共産党は“平和革命路線”を主唱し、正にこの日記が書かれている時期の最中、1949年1月23日の第24回総選挙では35議席を獲得する。このことは今思えば、下部構造たる日本の身体が冷戦構造に変身しつつある最中に、政治という上部構造に浮かんだ幻影、あえていえば歴史のジョークだったのかも知れない。その1年後、コミンフォルム（共産党国際情報局）は平和革命路線を批判し、日本共産党は五十年問題の大きな混乱に突入する。

日記の「激変する情勢」が実際に貴司のどのような思念によるものか不明だが、このようなアンビバレンツからくる不安が底流していたのだろう。

それを示すのが、⑫1949年1月24日の記載で、第24回総選挙で「共産党の当選者多数。谷口善太郎も五万票で当選。おやおや。」とある、それである。

貴司は1945年から1947年の丹波・胡麻郷村での開拓農民運動の中で、決定的に谷口善太郎と対立し、谷口を開拓農民運動への妨害者として指弾・抗争した。もちろん、すべて貴司が正しく谷口が間違っていたといえるものではないが、貴司は、谷口の行動が開拓民の現実の要求を実際的に解決できるようなものではなく、批判・攪乱分子としてしか位置づけられないという思いを強く持っていたようである。現実はどうであったのかは、運動史的検討を要するが、ともかくこの時点では開拓農民運動の“敵”というに近い認識をもっていた谷口が国会議員に当選したので「おやおや」なのである。貴司にとっては、胡麻郷と開拓農民運動は、「赤貧洗うがごとく、得るものは恥辱ばかりであった」¹⁴⁾とまでいわざるを得ないものだったが、そのような中でも、窮乏する開拓民に寄り添っていたという自負はあったように見える。その体験は下部構造的、身体的なものであり、その視点から谷口が衆議院議員になるという歴史の上澄みを見たときの違和感が「おやおや」という言葉になったのであろう。

4. 「編纂委員会」との別れ

編纂委員会との別れは、突然やってくる。

1949年3月8日の日記は非常に長文である。

貴司はこの日、青山隠田（渋谷区神宮前）の小林三吾（小林多喜二の弟）の家を訪れ、蔵原、手塚と落ち合う。日本評論からの一万円に貴司が一万円を足して、近々小樽へ帰る小林セキさん（多喜二の母）への餞別とすることと、この際小林家と編纂委員会の間の契約書に調印を得ておこうという用件である。その後――

⑰「……私のもってきた全集第三回配本の評論集のゲラ刷りをひろげて疑問の点を三人で相談。わけのわからぬところや、ひどい誤謬のところを、全く手をつけずにそのまま刊行しようとする手塚君の考へを、大体において支持して行こうとする蔵原君の考へと併せて、自分にはかなりの不満なので、しまい「そういう編纂方針はブルジョア唯物論の見地に立っているものだ」と、二人をやっつける。手塚君は感情的になって「あなたは、あまりに原文に干渉すぎる、まえに出した党生活者などは、ずいぶん原文に手を加えてある。」という。この人の発想なり、表現に、かなり強いデマゴギーの傾向のあることを、きょうはじめて認識する。単に人に対してへんきょうな性質だけではないようだ。それで同君のデマゴギー的傾向はとちめないといけないと思って、「それは事実ではない、なぜそういうか。又どこが手を加えた箇所か？」と追求すると、同君はしまい「ところどころルビをつけてあるのがそうだ。」と答える。もうそれでやめる。しかしすっかり憂鬱になる。批判のない仕事、批判の精神のない仕事には、どんな小さなことでも、さびしくて立入れない。……」

蔵原の前で、貴司と手塚の間で相当に感情的な言い争いが行われたようである。

この言い争いの記述で、自ずから明らかになってくるのは、小林多喜二全集の編纂方針についての、考え方の大きな違いである。

貴司は「わけのわからぬところや、ひどい誤謬のところ」は適宜修正加筆してしまおうという考え方のようである。それに対して、蔵原・手塚の立場はそのまま文献性を維持して原文を尊重していこう、というものである。

これをくらべてみれば、全集編纂の態度として、誤りや誤記なども含めて、とりあえず尊重し保存していくのが当然の文献編纂の基本であり、蔵原・手塚の考え方が正当であることはいうまでもない。貴司はそのことに全く気付いておらず「ブルジョア唯物論だ」とか「批判精神のない仕事」だとかいう見当違いの文句を書き留めている。編纂者としての基本的常識を欠いていることをすっかり露呈してしまっているのである。

いったい貴司は、どのような多喜二全集を編纂しようとしていたのだろうか。手がかりは、自ずから日記の文中に顕れている。それは「まえに出した党生活者などは、ずいぶん原文に手を加えてある」という手塚のクレームである。貴司がこれ以前に編纂した「党生活者」は、戦前のナウカ社版全集のものと、戦後1947年の民衆書房版である。小樽文学館に所蔵されている赤字入りの「党生活者」ゲラ刷りは、筆者の検討では、民衆書房版発刊のためのものであるが、

ゲラには新たに付加するルビの指定が沢山書き加えてある。それらは戦前のノウカ社版にはないもので、戦後民衆書房版発刊の際に新たに付加されたものということになる。もちろん作者の死後のことだから、この新たなルビは編纂者、つまりは貴司が一存で付加したものというほか無い。

実は、ルビにこだわる点で奇妙な一致がみられる多喜二の刊本がある。それは作家同盟版の「蟹工船」である。その版面は、一見して異様な感じを受けるほど沢山ルビが付されている。ほとんど総ルビである。もちろん、底本として認められているものには、そんなに沢山のルビは振られていない。つまりは作家同盟版の総ルビは、編纂者の独断的な仕業というほか無い。筆者はそのことで逆に作家同盟版編纂に確かに貴司が関わっていたのではないかと感じるくらいである。

それはともかく、1949年3月8日に手塚が指摘した「ところどころルビをつけている」というのは民衆書房版「党生活者」のことであろうと思われる。そしてこの、ルビ云々から想定される貴司の編纂に関する考え方は、だれにでも読みやすい大衆的な「本」にすべきだ、という大衆路線である。大衆にとって読めないもの、読みにくいものはすなわち「無」に等しいという考え方で、いわば、芸術大衆化論争以来の基本的なスタンスである。文献性ということについての理解がきちんとあったようには思えない。

このあと、言い争いの後の気まずい雰囲気を抱えながら帰途についた三人の、その中での貴司と蔵原との会話が、延々と綴られている。何故か二人は、エンゲルスのパルザック論について議論している。蔵原は貴司の苛立ちをなだめるように、一生懸命話の接ぎ穂をつないでいるようなところがあり、蔵原という人のまとめ役、コーディネーターとしての人柄が顕れて面白い。しかし、この日を境に、貴司は多喜二全集編纂委員会への意欲を失ったように見える。

ただ一つだけ、この一ヶ月ほど後に果たした仕事がある。

それは、多喜二が虐殺された当時の中央公論の担当編集者中村恵を探し出し、当時のことを聞き出しているのである。同席したのは勝本清一郎で、意図的かどうかはわからないが手塚英孝は加わっていない。

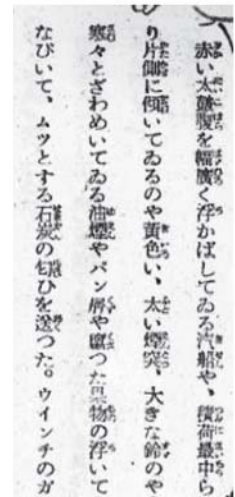


図3 ルビが多い作家同盟版「蟹工船」

⑱ 1949/4/18 「……出版部（*慶応大学の）にいる中村恵君をよび出し、近所のすしやの二階で田中（*慶應の人）、勝本（*勝本清一郎）、自分ら四人で夜に入るまで話している。主として中村君に昭和八九年頃小林多喜二に面会していた時のことを訊く。七年の初夏ごろ、有楽町の塩瀬で二度あい、「党生活者」執筆、文芸時評（二回）執筆等を依頼した。当時の中央公論はナルプ系の左翼作家を支持する方針でいた。最初小林との連絡をしてくれたのは間宮茂輔君であった。当時間宮君は全協の仕事をしていた。八月下旬に、党生活者の原稿は二度にわけて郵送してきた。原稿に題号はなく、あとでハガキでしらせてきた。原稿料のことで電話をかけてよこしたこともある。……題名をかえて発表することについては、立野と貴司の二人にきてもらい協議の上、貴司が「転換時代」と命名した。その時、発表

の際、「党生活者」という題名が検閲等でどうしても困るとい時は、かえてくれていいという本人の意向を自分がもらっていた。（手紙でそういう申入れをうけたように思う）等々。」

このことは、手塚の解題にも書かれていて、定説のようにになっているが典拠は記されていない。この、貴司と勝本のインタビューが出所ではないのだろうか。

これを最後に、約4年間、小林多喜二全集編纂委員会の記載は貴司日記からなくなる。

5. 「小林多喜二全集」の完成と貴司山治

4年後の1953年3月1日、再び小林多喜二全集編纂委員会の記事が日記に登場する。

会議の場所は鷺宮の壺井繁治宅で、出席者は蔵原、壺井繁治、手塚英孝、宮本顕治、窪川鶴次郎に貴司という顔ぶれが記録されている。4年前とメンバーがだいぶ変わっていることが注目される。ただ、この日の記載はごく短く、会議の内容は全く書かれていない。

次いで、1953年5月3日で、同じ壺井繁治宅である。

この日の懸案は二つあった。一つは――

①⑨（貴司日記1953/5/3）「午後鷺ノ宮の壺井の家にゆく。小林多喜二全集編さん委員会。勝本君と久しぶりにあう、かれは小林の「三・一五」（*小林多喜二の小説「一九二八年三月十五日」）の原稿を保存していてその分の校訂を自分でしたゝめに、その部分の著作権が自分にあるという主張を二三年前から、委員会内へもちこんでいる、……『その校訂料として金五千元を君におくる……その代り、校訂者としての著作権云々の話は取りやめにしてもらいたい……将来ずっと小林多喜二の「三・一五」という作品の著作権が勝本清一郎にあるという話はちとへんだから』と私がいうと、キョトンとした顔になり、壺井がフートーに入れた五千元をわたすと、勝本は喜色満面それをポケットにすぐしまいこんで「それじゃ貴司君のいうとおり、一切の権利は委員会にあることを確認します」といってまもなくかへって行った……」

第二の懸案は――

②⑩「もう一つの厄介者は校訂者手塚君である。全集最後の日記と書翰集の原稿をにぎっていて、どうしても会へ引きわたさない……きょうはそれを同君からとり上げるのに、宮本、蔵原、壺井が全力をあげようという申し合わせだという。……おどかしたり……からかったりしたあげく、同君はそれでもまだあゝだのこうだのと偏執狂最後のねばりをつずけて、来る七日の晩にここへもってくるというところまで、みんなにおしつけられる。これも話が片ずいてさきへかへって行く。やれやれだ。……」

という内容で、前に触れたように、戦後最初の『小林多喜二全集』（いわゆる「新日本文学会版」）は、日本評論社、富士出版社、青木書店と版元は変遷したがともかく1952年いっぱいまで完結し

たのだ。従って、編纂委員会は残務整理の段階に入っていることが分かる。

さらにこの、残務整理をだめ押しするように、貴司の執拗な要求によって再度会議が開かれる。その概要は――

②(貴司日記 1954/7/2)「二時から壺井の宅で自分らの要求した小林多喜二編集委員会の集まり、……壺井の二階の一と間に藏原、宮本、窪川、壺井、手塚の五人がいて……壺井の苦しそうな報告によって、四五十万あるはずの剰余金が殆ど私などの知らない間に、いろいろなことに使われてしまっているのだとわかる。第一に、チェッコから……寄贈されてきた(*映画フィルム)受取費(税関)に約十万円、雑誌「多喜二と百合子」へ九万円、小林三吾に五万円……

これらの金を壺井宅にきて持って行ったのは前者は中野重治であり、後者は宮本顕治である。この二人とも全集編さん中は全然顔を出さず、……刊行会に金ができたと知ると、……勝手に持って行ってしまう連中である。

……残金十数万円について、その中から藏原への慰労金を提示した私に対して、みんな賛成……つぎに、残金十万円を文学賞へという私の提案は「今、新日本文学会はとんでもない連中に占領されている、文学賞を提案するとその連中に又掠奪される恐れがある、文学会の内部をもっと肅正してからでないと出せない」という宮本の主張をその他が支持。

私は五時ごろまでこんな話の中にいる間に、すっかりこんな人々に決別するときがきていると感じてしまう。……今日の連中は皆一致して、物事を機関にかけてはかるといった民主主義的な、集団主義的なやり方を、性質として理解しない。彼らが一致しているのは気のあったグループをつくり……どんなことでも決めてゆく古くさいやり方を、好んでいるということである。……」

二回目の“残務整理委員会”に貴司が持ち出したのは、委員会の経理が適正に行われたのか、という問題提起だった。会議にかけることもなく、会計係の壺井繁治との談合で金を持ち出してしまふ、それが私的流用でないのが救いだが、適正を欠いているというのが貴司の言い分であろう。そして、その基盤に、気の合ったグループでナアナアで物事をきめていく、非民主的な性行がある、と断じるのである。

かくして、「すっかりこんな人々に決別するときがきている」と結論づけるのである。

6. むすび――「書誌」の後にひろがる世界

戦後最初の『小林多喜二全集』編纂委員会に関する同時代記録としての貴司の日記は、1954年7月2日で尽きる。

ところが、11年後、1965年8月12日、貴司は「昭和20年代の日記帳を引きずり出して」1953～54年頃の編纂委員会のことを想起し、またもや“総括”を始める。その執拗さは、月日の記載の錯乱なども含めて、いくらか異常な感じがする。思い残したことが少なくないということであろうか……長文なので要点をまとめると(「」内は原文)――

1. 1948年頃、「……経理を『公平』にすると月二万円のかれ（*手塚英孝）の給料がまにあわないことがしばしばおこった。かれは手紙をよこし「あなたが立て替えてもちゃんとしはらうべきだ」との抗議。（改行）私はその立替えをことわった。（改行）するとかれは忽ち私に絶交状をよこし、徳永直に入説して徳永は『手塚の一生を保証すべきだ。わが陣営外の人（非党員の私のこと）に事務局をまかしておくのは間違いだ』との速達状を蔵原によこした。（改行）蔵原は何を思ったのか、私に『事務局長をやめてくれ』という手紙をよこした。私はすぐ自転車で蔵原宅に行き、帳面と預金帳と書類綴を引きわたした。」

その結果、事務局長は壺井繁治に引き継がれる。また、この記載から、同時代の記事からは必ずしも明らかでなかった事実、すなはち、この時期まで貴司が委員会の事務局長兼経理であったこと、手塚の給料は編纂委員会から支給されていたこと、貴司はこのいきさつの中で“正式に”蔵原から事務局長を罷免されていること、などが分かる。

この時、手塚の「絶交状」は蔵原に引き渡され、逆に徳永の手紙を貴司は見せられたと記載され、内容は確認できないが、この“給料トラブル”と貴司の罷免の背景説明は、あなたが10年後の貴司の“妄想”とはいえないものと思える。

だいたい最優先債権である給料を、理由を設けて遅配するといったことは異常で適切な経理処理とは考えられない。このトラブルが、1949年3月8日の小林三吾宅での争論の以前か以後かは不明だが、貴司と手塚の関係は窮極的悪化に落ち込んでいたことが推察される。

2. それまでの支出の確認や手塚退職金五千円などを決め、貴司は「これで一応の精算をしたが、あとは党员諸君で好きなようにやりたまえ」と、編纂委員会を去った、と記している。

3. 以来十二年、委員会の収支は全く闇の中となり、「去年」（1964年）になると蔵原自身が貴司に「壺井が、一向小林全集の収支を報告しない」とぼやくに至る。貴司は壺井とともに、蔵原も何か金のことで関係しているのではないかと疑い、密かに中野重治に相談する。

4. 当時蔵原は共産党本部書記局からいじめられ「本部を辞めて著作に専念したい」とぼやく、ぬやまひろしからは党歴詐称で罷免決議まで出されていたので、その上、金の問題が出たら命取りと中野らも内々心配していた。（スキャンダルで足を引っ張るようなことはしないという“中野の高さ”を貴司は評価している）

6. 貴司が直接蔵原に問いただしたところ「絶体はない」という返事だった。

7. ……そうなると、少なくとも此の十年余りの間に多喜二全集の印税の委員会の取り分百万以上が壺井の手許にあるはず、ということになる……

記載は謎を残す形で、とぎれている。

以上のような、1947年から1965年に及ぶ「小林多喜二全集編纂」に関わる貴司の記述を通観する時、まず、10年の怨念が書かしていると思わざるを得ない筆の走りやゴシップ的な話を捨象して、一体その「書かしている」根底に何があるのかを考えるべきであろう。

するとそこには、小林多喜二という一人の、虐殺されて世を去った作家の存在そのものに、同時代を生き、同じように生死の域をかいくぐってきたものとしての、並々ならぬ思い入れが

……いくら断とうとしても断ち切ることができない想いがあったことがまず、察せられる。

しかも、1965年の最後の日記によれば、貴司は蔵原から、事務局長不適任として罷免されていたのである。そのことは、同時代の日記には書かれていない。書けなかったのかも知れない。

貴司は、1949年3月8日の小林三吾宅での議論などを通して、言いつくろってはいるが、手塚の主張に破れたことを自覚したと思う。蔵原も、貴司は編纂者として“向いていない”と判断したのであろう。

ずっと以前から、情に流されやすい貴司にとって、蔵原は頼るべき明晰な裁断者だった。かつての大衆文学論争の中で被告席に立たされた貴司にたいする、冷徹な検察官が蔵原であり、その“論告”の論文に貴司は「自分の顔が蒼めてくるのを覚えた。」¹⁵⁾と記している。その蔵原の“罷免”の裁断に、貴司はすぐ従ったようだ。即刻「自転車で」帳簿などを蔵原宅へ返しに行く、その行為には、他意はないように見える。ただ、無念ではあっただろう。10年を経て突然日記に初めてそれを書き付けるとするのは、その思いの表白でもあろう。

そしてもう一つの、明瞭には書かれていないが、一貫したトーンとして流れている問題点がある。それは最後に一回だけ言葉として書かれている。1965年の日記の「あとは黨員諸君で好きなようにやりたまえ」という言葉である。

これも、同時代の日記記述にはなく、10年後の文章に出てくる。そういう意味では、実在した台詞ではなく貴司の想念の中の言葉かも知れない。ただいえることは、貴司は1933年の昔から「多喜二」に関わりながら、つねにこれを狭い党派的な「財産」として扱うのではなく、誰にでも親しめる開かれた知的財産として世にあらしめたい、と想っていたことは明かである。小説「一九三三年」¹⁶⁾の中でも、潜行中の宮本顕治と密会して、頓挫した多喜二全集の編纂に関して貴司は――

「作家同盟にやらせておけばもう第三巻ぐらいいは出せていたと思う。それをしいて党中央委員会刊行とすることによって、合法的に読める成田（*小林多喜二）の作品集を全部非合法化してしもうことになる。その必要があるのかねエ。もし成田の作品をより広い大衆に読ませるようになるのが目的なら、文連は勿論、作家同盟で出すのすらやめて、普通の商業出版社か、超党派的な大衆の手による成田全集刊行会かをもうけてそこでやらせるようにするのが本当だと思うがネ、」

――と宮本にいうシーンを書いている。確かにそれも一つの理想像であろう。

しかし現実の戦後の編纂事業は、そのようになされたわけではない。

始めの形態は「新日本文学会」という、一応民主的な考え方の文学者を分け隔てなく集めるという趣旨の文学団体が編纂発行主体となる形で発足し、編纂委員も本稿71頁に書いたようにある程度幅のある9人が列記された。実態としては、すでに検証したように蔵原ほか数名の実働部隊で、貴司は非黨員シンパとして“幅広さの証”として加わっているような形である。

しかし、1968年5月刊行の『定本小林多喜二全集』になるとこの連名は

江口渙、蔵原惟人、壺井繁治、手塚英孝、宮本顕治 <校訂解題>手塚英孝

という形に縮小され、手塚英孝責任編集、共産党監修という旗幟が鮮明になっている。このような流れは、実は『定本版』を待つまでもなく、1949年あたりと推定される貴司罷免からすでに始まっているという印象を受ける。つまり、貴司が編纂者として不適任であると同時に、非党員を事業の責任者としておく積極的理由が見いだせない、という判断もあったのではないかと考えられる。大衆的基盤で、という理想像は一旦棚上げしても、十分な文献的集約を果たしておかなければ、多喜二を後世に伝えられない、そのためには、曖昧な大衆的基盤を顧慮するよりも組織としての共産党に依拠し、その事業として進めざるを得ないし、またそれは1933年の、貴司などの想いとはまた別の、共産党としての「初一念」に叶うものだと考えられたのではないか。

かくして、「貴司日記」によって、戦後最初的小林多喜二全集『新日本文学会版』編纂の初期、約一年間のことはある程度明らかになった。しかし、そのあと、1949年～1952年の間のことは、やはりブラックボックスである。この期間は、占領政策の右傾化、朝鮮戦争、そして共産党はコミンフォルム批判に端を発する50年問題の混乱に迷入し、所感派と呼ばれた主流派は火炎瓶にシンボルされる武装闘争に突入する。そして宮本顕治など編纂委員会の主要なメンバーは非主流派である国際派に属することになった。

今思えば、この混乱期に、政治の巨大な潮流から見ればごく小さな文化的事業である「小林多喜二全集編纂事業」が、吹き飛ばされず維持されたことは驚くべきである。それはおそらく、手塚英孝という、貴司から見れば「偏狭、デマゴギー、偏執狂、変質者……」と悪罵の限りを尽くしている観のある人物の、その偏執的頑張りによって維持されたと考えるのが自然であろう。書誌研究者は時に、偏執狂、変質者にならざるを得ないのかも知れない。

そして、『貴司全日記』に照らしてみると、手塚英孝のようなキャラクターは、貴司と最もその合わないタイプであることが察せられる。

貴司は、⑦に引用したような、約束の時間には「ちゃんとやってきて立っ^てい」るような、生真面目な堅物は非常に苦手で、柳瀬正夢のように数時間も平気で遅刻してきてニコニコ笑っている人物を愛するのである。それにしても貴司は、手塚の例に見られるように、親しくなると間をおかず、その人物に対して罵倒と批難を始める。それも、変質者、キチガイ、異常者など極めて人格的な罵倒である。これは貴司の最大の悪癖と言うべきで、これによって実に多くの友人、知人と喧嘩別れをしていった。これを免れて、あるいは切り抜けて生涯付き合いが続いた人物は、ほんの数名に過ぎない。

それにしても、貴司は編纂委事務局長を罷免され委員会と疎遠になったことで、編纂委員会が翻弄されたであろう50年問題の波浪を見ないという幸せを享受した。1953年、委員会に戻ったときは、50年問題は一応の収束を見ており、編纂作業自体も完結していた。

……しかしそのために、小林多喜二の主要なテキストが調査編纂されるという重要な局面の後半が、未だにブラックボックスなのである……。

(2011/9/1 伊藤 純 フリーライター・貴司山治長男)

注

- 1) 『小林多喜二全集第三巻』、小林多喜二著作刊行会編纂、富士出版社1952/8/15発行、387-388頁。

- 2) 「貴司日記 1935/1/15」『貴司山治全日記……1919年～1971年・DVD版』, 立命館大学 貴司山治研究会(中川成美教授)編, 不二出版株式会社 2011/1/20 発行。

翻刻文は, 上記 DVD と同時刊行の『貴司山治研究』241 頁, あるいは「貴司山治『日記』(四)」関西大学国文学会紀要『国文学』86 号, 2003/2/17 発行, 24 頁。

- 3) 「『小林多喜二全集』の歴史」, 貴司山治, 新日本文学会編『小林多喜二全集第三巻・月報』新日本文学会 1949 発行。(この資料は未見なので, 中野重治「書かれるべき小林伝について」『中野重治全集第十八巻』筑摩書房 1997/9/20 発行, 106 頁に引用されている記載から再録した)。

- 4) 戦前の, 治安維持法をキーとした思想言論に対する取締りは, 「思想への弾圧」という強圧的次元だけで見られがちだが, 昭和十年以降になると, さらなる戦略が顕在化してくる。それは, 本文にふれたように, 「殴る蹴る」にかわって, 取調べも起訴もせず, 本来長期拘留の施設ではない環境劣悪な警察留置場に無期限に拘置する。

貴司の体験によればそれは警察犯処罰令の「浮浪徘徊」を理由として最大期限である 30 日の拘留を課し(これは裁判所ではなく警察署長の一存で行えた)これを毎月くり返すという手法での無期限拘留が実施された。「居宅が有り浮浪徘徊などおかしい」と抗弁すると, 係の巡査が黙って「右ノ者署名ヲ拒否セリ」と書いて巡査がサインしてそれで OK だったという。

さらには, 弾圧と表裏に「思想改変」「転向誘導」, そして転向者を体制内で再利用する「良民化再利用」というノウハウが“普及”した。拷問死もやむを得ず, という「強圧手法」と「良民化再利用」の両面があからさまに認められる。「貴司日記」でも, 貴司自身を含め, 実に多くのかつてのシンパ, 活動家, 党員などが, この戦略の下, 例えば思想善導の保護司として, 満鉄の働き手として, 新聞記者として, などなど, 準戦時体制のさまざまな部署で生活の資を得つつ“再利用”されている有様が記されている。

稀代の悪法とされる「治安維持法」の, このような両面性のある全体像は『治安維持法小史』奥平康弘(岩波現代文庫, 岩波書店 2006/6 刊)に教えられるところが多い。

- 5) 「貴司日記 1934/3/26」, 『貴司山治全日記……1919年～1971年・DVD版』, 立命館大学 貴司山治研究会(中川成美教授)編, 不二出版株式会社 2011/1/20 発行。

翻刻文は, 『貴司山治研究』196～197 頁, あるいは「貴司山治『日記』(一)」, 関西大学国文学会紀要『国文学』81 号, 2000/11/30 発行, 114 頁。

- 6) 「貴司日記 1938/5/20」, 『貴司山治全日記……1919年～1971年・DVD版』, 立命館大学 貴司山治研究会(中川成美教授)編, 不二出版株式会社 2011/1/20 発行。

翻刻文は, 『貴司山治研究』295～296 頁「貴司山治『日記』(四)」関西大学国文学会紀要『国文学』86 号, 2003/2/17 発行, 48 頁。

- 7) 「『定本小林多喜二全集』編集の頃」, 宮本阿伎, 『民主文学』267 号, 988/2/1 発行, 136-141 頁。

- 8) 「小林多喜二全集と手塚英孝の仕事」, 大田努, 宮本阿伎, 『民主文学』388 号, 1998/2/1 発行, 98-109 頁。

- 9) 「多喜二全集の完成」, 手塚英孝, 多喜二・百合子研究会『多喜二と百合子』通巻 2 号, 1954/12 発行。

- 10) 「“多喜二学”への眺望」佐藤三郎, 『伊勢崎多喜二祭記念論集』。

- 11) 「小林多喜二の死と貴司山治——貴司を出所とする『党生活者校正刷』(小樽文学館所蔵)をめぐって」, 伊藤純, 徳島県立文学書道館研究紀要『水脈』第 9 号, 2010/3/31 発行, 1-10 頁。

「貴司山治インターネット資料館」<http://www1.parkcity.ne.jp/k-ito/suimyaku/2010.pdf> にも同文を掲載。

- 12) 『手塚英孝略年譜』, 「佐藤三郎ブログ」, 2011/8/31 閲覧。

http://blog.goo.ne.jp/takiji_2008/c/f0d5bfc099c1b9d085f671eab018c1a4

- 13) 「私の文学史」, 貴司山治, 貴司山治インターネット資料館, 第 6 章 4 節「柳瀬正夢との出会い」。

<http://www1.parkcity.ne.jp/k-ito/bungakusi/bun1/framepage.htm>

小林多喜二全集の編纂過程（伊藤）

- 14) 貴司山治「わが遍歴（未定稿）」、『日本プロレタリア長篇小説集（3）ゴーストツップ』，三一書房 1955/1/31 発行，231-235 頁。
- 15) 「私の文学史」，貴司山治，貴司山治インターネット資料館，第 8 章 2 節「蔵原惟人の“論告”」。
<http://www1.parkcity.ne.jp/k-ito/bungakusi/bun1/framepage.htm>
- 16) 貴司山治「一九三三年」，小説集『丹波アリラン』伊藤純 2006/11/1 編刊，71 頁。
または，貴司山治インターネット資料館 <http://www1.parkcity.ne.jp/k-ito/1933/1933-honbun.htm>

